
月に捧ぐ

ゆきな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に捧ぐ

【Nコード】

N4435U

【作者名】

ゆきな

【あらすじ】

函館戦争終結後、密かに生き延びていた土方と斎藤は蝦夷の地で二人ひっそりと暮らしていた。ある夏の夜、二人は月を見上げ、過ぎ去った日々のことを思い出していた。（ノベリスト様にて公開済み転載分）

静かな夜だった。季節は夏へと移ったが、この蝦夷の地は昼でもからりとした風が吹く。夜ともなれば一際だ。

京とは違う風を湯上りの火照った肌に送りながら、斎藤はふと歩みを止めた。おもむろに進路を変え炊事場に寄ると、酒を持って来た道を戻る。

廊下を進むうち、通りかかった縁側に人影を見つけて再び立ち止まる。満月の明かりに照らされたそこに腰掛けているのは、今まさに呼びに行こうとしていた人物。明日を迎えることを恐れるように、一際無口に今日一日を過ごした男だ。

斎藤が近づく気配を感じ取っていたのであろう。土方は驚いた様子もなくちらりと彼のほうを見て、また月へと視線を戻した。

「お一人で月見酒ですか。」

「一人じゃねえよ。」

「……そうですか。」

土方の手には酒の入った盃がある。そして彼の隣にも、一つ。

自分のために用意されたのではない盃の意味を悟って、斎藤は反対側に腰をおろした。

「命日は――」

「わかってる。だがこんないい月夜だ。一日早いからってだけの理

由で声かけなかったら、またうるせえだろ？」

「そう、ですね。」

冗談交じりの声に苦笑して返せば、ぐいと徳利が差し出される。持参した盃で受けると、小さな水面に月が揺れた。

土方の隣の空いた席に盃を掲げて飲み干すと、ふわりとした酒の香が鼻に抜ける。普段飲んでいるものとは異なる芳醇な味わいに、純粹に美味いと思う気持ちと、こんな良品をどこに隠して一体誰と飲む気でいたのかと問い詰めたくなるような思いとがない交ぜになる。

だがその全てを酒と共に飲み込んで、斎藤は息を吐いた。すぐに次の酒が注がれ、そのまま静寂だけがその場に降りおちる。

「……なあ、斎藤。」

やがて、ぽつりと名を呼ばれ顔だけで振り返る。土方は傍らに徳利を置き、自分の盃に映る月を見つめていた。

「お前を疑ってるわけじゃねえんだが……、その、総司とは……」

そう言って、土方は言葉を切る。何かを言おうとしては止め、止めてはまた言葉を紡ごうと思案している様は、普段の彼とは様子が違う。それを黙って見つめながら、斎藤は彼が何を言おうとしているのかを考えた。

総司とは？ 俺を、疑う？

……まったくわからない。

新選組に身を置き、彼を支える役目を負っていた時には、彼が出そうとする指示も、その裏に隠された苦悩も悲哀も、何もかもわかったというのに。

戦場から身を引いて蝦夷に移り、彼のすべてを支えたいという想いの正体を知るにつれて、彼の心が、考えが、見えなくなってしまう。これは彼との距離が離れてしまったということなのだろうか。

思案に沈む斎藤には気付かず、土方が顔を上げる。盃を呷って一息に飲みこむと、ぐると身体ごと向きなおった。

「総司とは、何もなかったのか？」

「……………は？」

唐突な質問に、斎藤の目が見開かれる。土方の瞳に、自分の間拔けな顔が映るのを見て、慌てて口を閉じ庭へと視線を移した。

それをどう取ったのか、土方はさらに言い募る。

「お前、他の隊士には斎藤と呼ばせていただろう？なのに、総司には名で呼ぶことを許していた。嫌がっているようにも見えなかった。だから……」

「なにを…」

言っているのだ、と思う。

総司のことを特別扱いしていたのはどちらだというのか。誰が見ても、総司は土方に別格として扱われており、そこに特別な想いがあるのではと勘繰られても不思議ではなかったというのに。

だが、振り返って土方の顔を目にして、斎藤は言葉にするのをや

めた。

目が合った瞬間慌てて逸らされた瞳、言葉にしたことを後悔するように歪められた口元、仄かに染まった形の良い耳。想いを通じ合った相手が、自分にしか見せない表情で隣にいる。それで充分ではないかと、そう思えてしまったのだ。

今も昔も、自分は彼には敵わないのだと斎藤は言葉を飲み、ふ、と口端を上げた。

「では土方さんは、近藤さんや源さんと関係があったのですか？」

「あ、あるわけねえだろ！」

「ええ、わかっています。呼び方など関係ありません。」

目を剥いて振り向く男の視線を捉え、ぐ、と上半身を乗り出す。逃げを打つ身体を腕を掴むことで引きよせて耳元に口唇を寄せた。

「あの頃から、俺にはアンタしかない。」

斎藤の目の前で、桜色の耳朶がさらに濃い色に変わっていく。そこに口付けようとした瞬間、胸倉を掴まれ引き戻された。挑むような視線が斎藤を射抜く。

「だったら、証明してみせろ。」

頬は僅かに染まっているものの、鋭い眼光は鬼副長と恐れられた頃の強さを失ってはいない。この瞳に射抜かれて震え上がった隊士や浪士を何人も知っている。

だがそれは今、全く別の意味で斎藤を震えさせた。

「では―」

自然と湧き上がる笑みに口角をあげ、斎藤はそっと、自分以上に素直な感情表現とは縁遠い元上司に口付けた。

+++++

月が中天より西に傾き、子の刻を回る。

閉じられた障子の奥から漏れる押し殺した声を聞きながら、『彼は盃に唇を寄せた。その端が愉快そうに持ち上がる。』

「ほんと鈍すぎるよねえ、一くんも土方さんも。僕があんなに頑張って憎まれ役を買ってあげてたのに、全然気づかないんだから。…今頃遅いよ。」

ずっと好きだった、と言ったら、キミは笑うだろうか。いや、呆れたようにため息をつくんだろうな。でも、冗談なんかじゃないんだ。

誠の信念の元に、全ての迷いを振り切って剣を取る姿を見た時から。

無敵の剣と呼ばれる剣術が、人の何倍もの努力の上に築かれていると知った時から。

もしかしたら、初めて剣を交わした時からかもしれない。

その瞳を見た時、もう囚われていたのだから。

「できることなら、僕がそばにいたかった。でも叶わないでしょ、そんなの。」

ずっと見ていた。

だからこそ、キミ自身が気付いていないキミの気持ちが変わってしまった。彼に向けられる、信頼だけではない視線の意味を。

そして知ってしまった。

この身を蝕む病魔はキミのそばにいることさえ許してくれないと。キミが心から想う人と共に歩めるようにすることくらいしかできないのだと。

その想いは、どうやら気付いてもらえなかったようだけれど。でも、キミは今、キミが望んだ人のそばにいる。

それだけで、その結果だけで、十分だ。

「ま、僕は一くんに組み敷かれるつもりはなかったし、そう言う意味では正解だったのかもしれないかな。」

くすくすと楽しそうに笑い瞳を細めると、『彼』は盃を置いて立ち上がった。

「……ごちそうさま。」

含みのある言葉と視線を障子の向こうに投げかけ、すうつと瞳を閉じる。その姿は瞬く間に月光に解け、あとには空になった盃だけが残されていた。

（後書き）

初書き薄桜鬼。初書きBL。そして初書き二次創作です。

何かと土方に突っかかっていったのは斎藤の気を引きたかったから。一くん一くんと名前を呼んでまとわりついたのは土方に見せつけたかったから。

同じ方向を向いているが故に、お互いの存在と自分の想いに気付かなかった二人の気持ちに、誰よりも早く気付いたのは沖田だった。そんなところから生まれたお話です。

某サイト様で盛り上がった勢いのまま、特に下調べも何もせず書いてしまいました。転載に際し修正も考えたのですが、これはこのまま、書いていた当時の勢いのままにいくとそのままにしています。内容も文章も突っ込みどころ満載ですがそこはご愛嬌というところで何卒ご容赦ください。

お読みいただき、ありがとうございました。

初投稿…2011-05-17 （ノベリスト様にて）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4435u/>

月に捧ぐ

2011年10月9日10時29分発行